



国木田独歩全小説紹介

目次：01『たき火』／02『星』／03『源おぢ』／04『おとづれ』／05『武蔵野』／06『野菊』／07『火ふき竹』／08『詩想』／09『忘れえぬ人々』／10『まぼろし』／11『死』／12『二少女』／13『河霧』／14『鹿狩』／15『わかれ』／16『無窮』／17『驟雨』／18『関山越』／19『遺言』／20『郊外』／21『初恋』／22『置土産』／23『小春』／24『初孫』／25『帰去来』／26『牛肉と馬鈴薯』／27『巡查』／28『波のあと』／29『一火夫』／30『湯ヶ原より』／31『富岡先生』／32『画の悲み』／33『少年の悲哀』／34『園遊会』／35『鎌倉夫人』／36『指輪の罰』／37『空知川の岸辺』／38『酒中日記』／39『神の子』／40『日の出』／41『別天地』／42『非凡なる凡人』／43『運命論者』／44『馬上の友』／45『悪魔』／46『山の力』／47『第三者』／48『正直者』／49『捕虜』／50『女難』／51『親子』／52『一家内の珍聞』／53『雪冤の刃』／54『春の鳥』／55『夫婦』／56『田舎教師』（『帽子』）／57『あの時分』／58『号外』／59『入郷記』／60『恋を恋する人』／61『肘の侮辱』／62『波の音』／63『泣き笑ひ』／64『疲労』／65『窮死』／66『都の友へ、B生より』／67『湯ヶ原ゆき』／68『都の友へ、S生より』／69『暴風』／70『節操』／71『渚』／72『竹の木戸』／73『二老人』

01『たき火』

『国民之友』明治二九（1896）年一二月。第一文集『武蔵野』に所収。御最後川の岸辺近く。漁民の子供たちが、父を待ちながら焚き火をしようと、波打ち際の様々な漂流物を集めてくる。最後に訪れる奇跡的な一瞬に捧げられた詩的掌編。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card335.html>

02『星』

『国民之友』明治二九（1896）年一二月。第一文集『武蔵野』に所収。都に近い田舎に一人の年若の詩人が住む。四季で変わる庭の姿の楽しみ、落ち葉を焼きながら眺める冬の空に輝く星の美しさ、そして不思議な夢。詩情豊かに自然美を描く。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42207.html>

03『源おぢ』

『文芸倶楽部』明治三〇（1897）年八月。第一文集『武蔵野』に所収。都会から佐伯へやって来た年若の教師がどうしても忘れられない翁、源叔父その人の半生を宿屋の主人の伝聞を頼りに綴り出す。妻の死など、一小民が出会う悲劇的な事件の数々。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card322.html>

04『おとづれ』

『国民之友』明治三〇（1897）年一二月。第一文集『武蔵野』に所収。宮本二郎は永遠を誓った女性の千葉富子に背かれ、失意のなか暮らす。そして偶然の出会いが訪れるが、富子の隣りには新しい恋人がいた。独歩自身の恋愛事件を材料にして描いた一篇。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42199.html>

05 『武蔵野』

『国民之友』明治三〇（1897）年十一月。第一文集『武蔵野』に所収。今も昔も変わらぬ武蔵野の自然美、それを詩情に満ちた筆致と関連する様々な資料を引用しながら描き出す。武蔵野の道はどこであれ、迷ってしまっても、そこを歩く者を失望させない。独歩の小説の中で最も名高い名作。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card329.html>

06 『野菊』

『家庭雑誌』明治三一（1898）年一月。一九歳の秋、女学校から帰ってみると机の上に一通の封筒があり、中には野菊の花一輪と「さをとめ塚」にまつわるある手紙が入っていた。民話を伝える軽い作品。学習研究社版全集、第二巻。

07 『火ふき竹』

『家庭雑誌』明治三一（1898）年三月。維昌は六歳の幼子。茶屋の老婆が茶釜の前で蹲って、煙たくなりながらも、火の番をしていたのを偶然目撃した維昌は、老婆の為に火ふき竹を上げようと思いつく。学習研究社版全集、第二巻。

08 『詩想』

『家庭雑誌』明治三一（1898）年四月。第一文集『武蔵野』に所収。夢見る童が登場する「丘の白雲」、助け合った旅人の悲しい運命を描く「二人の旅客」、少女が埋めた梅の種が発端となる「路傍の梅」など、一行で終わる四編の超短編の「詩想」の数々。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42204.html>

09 『忘れえぬ人々』

『国民之友』明治三一（1898）年四月。第一文集『武蔵野』に所収。ある宿屋で無名の文学者である大津弁二郎と無名の画家である秋山松之助が会う。そして、大津は秋山に向かって自身が各地で書き溜めてきた「忘れ得ぬ人々」について物語る。独歩「小民」思想を伺わせる一篇。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1409.html>

10 『まぼろし』

『国民之友』明治三一（1898）年五月。第一文集『武蔵野』に所収。「絶望」と「渠」の二つ小品からなる。前者では幻影のように消え去ってしまう梅子を前にして生に絶望する男が描かれ、後者では酒に溺れ自堕落になっていく男の姿を痛切に描く。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42208.html>

11 『死』

『国民之友』明治三一（1898）年六月。第四文集『濤声』に所収。「自分」は京都へ教師として赴任するにあたって友人の富岡竹次郎を訪おうとする。が、友人宅で発見したのは富岡が自殺していた姿だった。死体を前にして死に関する哲学的思索が始める。学習研究社版全集、第二巻。

12 『二少女』

『国民之友』明治三一（1898）年七月。第四文集『濤声』に所収。東京電話交換局の交換手をしている江藤お秀と田川お富の対話から女性差別や貧困といった社会問題をえぐり出す。後年の『竹の木戸』に繋がっていくような作。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card2945.html>

13 『河霧』

『国民之友』明治三一（1898）年八月。第一文集『武蔵野』に所収。東京での成功を夢見て、友に祝われながら意気揚々と故郷を出た上田豊吉。しかしその二〇年後、志した事業は失敗し、豊吉は住み慣れた故郷へと帰ってくる。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42200.html>

14 『鹿狩』

『家庭雑誌』明治三一（1898）年八月。第一文集『武蔵野』に所収。叔父に誘われて鹿狩りに行った十二歳の少年が、たまたま、大きい鹿を鉄砲で仕留めた時の思い出話を回想的に物語る。ユーモアとペースに満ちた佳作。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42203.html>

15 『わかれ』

『文章倶楽部』明治三一（1898）年一〇月。第一文集『武蔵野』に所収。恋愛の痛手によって、人里すくない別荘に独居する田宮峰二郎。彼がその僻地に住み始めて一年半が経とうとしている。しかし、ついに外国へと旅立つため、その住み慣れた場所へ別れを告げようと彼は決意する。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42210.html>

16 『無窮』

『萬朝報』明治三二（1899）年九月二〇日。無窮無限を考えるのに数の連続を持ち出すのは、数学者のすることだ。無限は別の仕方で会得することができる。日常の一情景をスケッチ的に切り取った詩的小品。学習研究社版全集、第二巻。

17 『驟雨』

『萬朝報』明治三三（1900）年二月二〇日。旅の途中に体を休めようと立ち寄る宿屋。そこで勢いよく降り注ぐ夕立。雨があらゆる不快が洗い流す。そしてある旅人とそこで出会い、一時の交流のなかで一冊の手帳を受け取る。学習研究社版全集、第二巻。

18『関山越』

『中学世界』明治三三（1900）年六月。鶴岡行きの途次、関山で見かけた男の恋愛事情をめぐる悲劇を綴りとめた小品。遺された男の手帳には、彼の奇っ怪な行動の理由が書き記されていた。学習研究社版全集、第二巻。

19『遺言』

『太平洋』明治三三（1900）年八月。第一文集『武蔵野』に所収。日清戦争中は、明治二七年の天長節。舞台はベカ島近くに集合していた日本艦隊のうちの一つ。水野という水兵宛てに来た母親からの「遺言」に等しい手紙が朗読される。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42209.html>

20『郊外』

『太陽』明治三三（1900）年一〇月。第一文集『武蔵野』に所収。生徒にも父兄にも評判のいい村立小学校校長の時田。自分の才能を疑い始めてきた画家の江藤。自殺者の多い踏切の傍の八百屋の主人。郊外に起きる小事件とその心象を淡々と描いていく。学習研究社版全集、第二巻。

21『初恋』

『太平洋』明治三三（1900）年一〇月。第一文集『武蔵野』に所収。一四歳、村にいる頑固老人の大澤先生に対して、餓鬼大将であった「僕」は孟子の話題で挑発しようとする。しかし、それが縁になってその一家と親しい日々を過ごすことになる。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42205.html>

22『置土産』

『太陽』明治三三（1900）年一二月。第一文集『武蔵野』に所収。三角餅が名物の小さな田舎の茶屋、そこで働くお絹とお常。二人と親しい吉次が、彼女たちに自分が従軍して身を立てようとする決心をついに告げようとする。しかし、その告白は叶わない。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42198.html>

23『小春』

『中学世界』明治三三（1900）年十二月。第一文集『武蔵野』に所収。ワーズワース詩集に心酔していたが、最近はその熱意もなくなってきた男が、その詩集に関する感傷、そしてワーズワースを読み始めた佐伯での思い出を語っていく。独歩のワーズワース受容を知る上で欠かせない一篇。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42202.html>

24 『初孫』

『太平洋』明治三三（1900）年一二月。第一文集『武蔵野』に所収。父親と母親、息子と妻、そして初めて生まれてきた孫。初孫の登場によって幸福に変化する家族の姿を父親の書簡を通じて、間接的、素描的に表現する短編。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card42206.html>

25 『帰去来』

『新小説』明治三四（1901）年一二月。第四文集『濤声』に所収。吉岡峰雄は東京でそれなりに成功した二七歳の青年。同郷の小川綾子を結婚相手と定めて、一時帰郷するが、そこで彼を待ち受けていたのは、恋愛の悲しい結末だった。学習研究社版全集、第二巻。

26 『牛肉と馬鈴薯』

『小天地』明治三四（1901）年一二月。第二文集『独歩集』に所収。牛肉（理想）か馬鈴薯（現実）か。明治倶楽部に集まる青年たちの喧々諤々の議論の中で、そのどちらも否定する岡本の口が開く。独歩の驚異思想を知る上で欠かせないテキスト。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card323.html>

27 『巡査』

『小柴舟』明治三五（1902）年二月。第三文集『運命』に所収。故郷に妻子を残し、一人静かに暮らす巡査の山田。彼との交流の断片を描く。淡々としたスケッチでありながら、夏目漱石が写生文の境地に近いとして激賞している。学習研究社版全集、第二巻。

28 『波のあと』

『小柴舟』明治三五（1902）年三月。大阪、兵庫、徳島の間を航海する那賀川丸の船長はある女性から海上での自殺幫助を依頼されてしまう。彼女の自殺を幫助すべきか否か。ミステリアスな語りで読む者を引き込む。学習研究社版全集、第二巻。

29 『一火夫』

『小柴舟』明治三五（1902）年四月。「余」は旧友と久しぶりの再会を果たすが、そこでひょんなことからある男に関する噂話を聞く。そして回り回って、結果、変わり果てたその男と運命的な出会いを果す。学習研究社版全集、第二巻。

30 『湯ヶ原より』

『山比古』明治三五（1902）年四月。湯ヶ原の温泉宿中西屋の女中、お絹。彼女に恋し、そして失恋した男の心情を友人に宛てた書簡という形で描き出す。一種の恋愛至上主義が表明されて

いる。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1406.html>

31 『富岡先生』

『教育界』明治三五（1902）年七月。第二文集『独歩集』に所収。富岡先生の愛娘である梅子をめぐって、先生の私塾に学んだ三人の男が競って結婚を所望する。だが、頑固になった富岡先生はそれに容易に応じない。一小民の輪郭を描く。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card4514.html>

32 『画の悲み』

『青年界』明治三五（1902）年八月。第三文集『運命』に所収。画の上手い少年岡本は、それ以上に天才をみせつける少年志村に敵愾心を抱いていた。一時、写生を通じて二人の仲は急接近する。けれども志村は一七歳で夭折してしまう。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1411.html>

33 『少年の悲哀』

『小天地』明治三五（1902）年八月。第二文集『独歩集』に所収。少年は下男に連れられ、ある女性に出会う。想起された社会の下積みに生きる薄幸な漂泊の女のもっていた、いかんともしがたい人生の別離の悲哀を、永遠の自然との対照において描く。学習研究社版全集、第二巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card334.html>

34 『園遊会』

『園遊会』（金港堂書籍株式会社）明治三五（1902）年一〇月。課題小説。園遊会好きな「自分」と彼の妹の国子が浅田老侯の別邸に赴いた時の一場面を描く。戯作めかした皮肉とユーモアが特徴的な小品。学習研究社版全集、第二巻。

35 『鎌倉夫人』

『太平洋』明治三五（1902）年一〇～一十一月。第四文集『濤声』に所収。柏田勉が鎌倉の橋の下で釣りをしていると、上の方から聞きなれた声が聞こえる。それはかつて決別した愛子と彼女の新しい恋人の会話だった。有島武郎『或る女』にも影響を与えた短編。学習研究社版全集、第二巻。

36 『指輪の罰』

『婦人界』明治三五（1902）年一十一月。ダイヤモンドの指輪を欲しがらる夏子とそれを叶えてやろうとする浪子。二人の少女の指輪をめぐる珍事を描く。メルヒェン風な工夫をこらし、教訓を含めた少女小説。学習研究社版全集、第二巻。

37 『空知川の岸边』

『青年界』明治三五（1902）年一二月。第三文集『運命』に所収。理想の住居を求め、東京から北海道の原始林へ単身で現地調査に向かう男、その道中を描く。けれど、彼が北海道へ移住することはなかった。小説というより紀行文に近い味わいを与える。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card333.html>

38 『酒中日記』

『文芸界』明治三五（1902）年一二月。第三文集『運命』に所収。妻を亡くした大河今蔵は馬島という島で酒に溺れた退廃的な日々を送る。その過去には、強欲な母親との間に起こった重大な事件があった。日記体で綴られていく男の過去。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card332.html>

39 『神の子』

『太平洋』明治三五（1902）年一二月。第四文集『濤声』に所収。世の中に死があることを不思議に思うか思わないか。二人の男が死について議論する。そして、男の一人は夢限的な世界で、ある老人へと出会い、自分が「神の子」だというお告げを聞く。学習研究社版全集、第三巻。

40 『日の出』

『教育界』明治三六（1903）年一月。第三文集『運命』に所収。とある倶楽部に、一人の客がやってくる。名誉ある肩書きある集まりのなかで、彼は自身を育てた大島学校という無名の小学校が創立された由来を語り始める。学習研究社版全集、第三巻。

41 『別天地』

『軍事界』明治三六（1903）年一月。初出題は「艦隊従軍」。第四文集『濤声』に所収。新聞記者の内田は戦況を伝えるため、戦艦「千代田」に乗り込み、従軍する。『愛弟通信』にあるような独歩自身の従軍経験が生かされた作品。学習研究社版全集、第三巻。

42 『非凡なる凡人』

『中学世界』明治三六（1903）年三月。第三文集『運命』に所収。非凡人ではないが、凡人ともいえない。敬愛すべき小市民、桂正作の半生をその友人が物語る。『西国立志編』を愛読する男の、天才ではないが非凡である行動の数々。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card324.html>

43 『運命論者』

『山比子』明治三六（1903）年三月。第三文集『運命』に所収。鎌倉の浜辺で「自分」は砂浜にブランデーを隠す怪しい男、高橋信造に出会う。運命の存在だと主張する彼の半生には、出生を

めぐる暗く悲しい事実があった。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card336.html>

44 『馬上の友』

『青年界』明治三六（1903）年五月。第三文集『運命』に所収。海軍士官の野村勉二郎は、偶然、日本第一の汽船会社の事務長である糸井国之助に出会う。二人は一五の頃の親友だった。二人を結びつけた馬の話を中心に回想される友情譚。学習研究社版全集、第三巻。

45 『悪魔』

『文芸界』明治三六（1903）年五月。第三文集『運命』に所収。君子と布浦武雄の間に突如入ってきた浅海謙輔。最初は謙輔に敵愾心を抱きながらも、キリスト教をきっかけにその神秘的な部分に惹かれていく武雄。しかし謙輔は一冊の随筆を残し、たった五ヶ月で旅立ってしまう。学習研究社版全集、第三巻。

46 『山の力』

『少年界』明治三六（1903）年八月。友達の兄から天然に磁力をもった不思議な石の存在を知らされ、友と「私」はその石を採る為、二人だけの秘密で東方便山の絶頂を目指す。少年時代の小さな冒険譚。学習研究社版全集、第三巻。

47 『第三者』

『文章倶楽部』明治三六（1903）年一〇月。第二文集『独歩集』に所収。お鶴と江間の間に関わった離婚問題を調停するために、双方の第三者である大井と武島が二人の行く末について書簡を交わし合う。四角関係を形作る書簡体小説。学習研究社版全集、第三巻。

48 『正直者』

『新著文芸』明治三六（1903）年一〇月。第二文集『独歩集』に所収。正直者にみられやすい主人公は、しかしそのために重大な罪を背負うことになった。下宿先で出会ったおしんと結婚問題に於いて、自身の流されやすい性格が引き起こした事件を回想する。学習研究社版全集、第三巻。

49 『捕虜』

『軍事界』明治三六（1903）年一〇月。金持ちの息子、大川三郎は新聞紙の発行を企てていたが、それに関し当時大きな問題である満州の地を見学してやろうと思いつく。しかし上陸すると彼は敵軍に捕まり、捕虜にされてしまう。学習研究社版全集、第三巻。

50 『女難』

『文芸界』明治三六（1903）年一二月。第二文集『独歩集』に所収。ある男が、二度も偶然に尺

八を吹く流浪の同じ盲人と出会う。その縁もあって、盲人は占い師に予言され、実際に自身につきまってきた女難の運命的半生を物語る。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card43243.html>

51 『親子』

『近事画報』明治三六（1903）年一二～翌年一月。夫人治子との合著『黄金の林』に所収。芝田之助と大宮園子は互いに恋に落ちるが、大宮家にとって芝が画家であることが許せず、仕方なく二人は駆け落ちする。予期せぬ来客によって園子が実家に帰るか否かの騒動が起こる。学習研究社版全集、第三巻。

52 『一家内の珍聞』

『婦人界』明治三七（1904）年一月。半分民家、半分下宿の木村家。家族と下宿人の一人である佐々城の間に起こった「アメンボー事件」と「端書事件」を中心に、日常のなかのちょっとした珍聞が語られる。学習研究社版全集、第三巻。

53 『雪冤の刃』

『新声』明治三七（1904）年一月。一九歳、絵筆一本で諸国漫遊を企てた青年は越後にてある大酒屋の厄介になる。そして、そこの家に嫁いできた花嫁が、ある夜、自殺しようと刃を手にしている場面を目撃する。学習研究社版全集、第三巻。

54 『春の鳥』

『女学世界』明治三七（1904）年三月。第二文集『独歩集』に所収。城山の頂上で一人の少年に出会う。名は六蔵。生まれつきの白痴でありながらも少年が自然にもっている美しさに語り手は魅せられる。が、最後には石垣から落下して死亡してしまう哀しい顛末に直面する。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1057.html>

55 『夫婦』

『太陽』明治三七（1904）年七月。第二文集『独歩集』に所収。互いに相思相愛で、七年の念願の末、とうとう結婚した坂本夫妻。しかしそれも束の間、坂本も妻もともに原因なき不安感を覚え出し、結婚生活に自信をなくしていく。若夫婦の不安を題材にした小説。学習研究社版全集、第三巻。

56 『田舎教師』（『帽子』）

『新古文林』明治三七（1904）年三月。後、「帽子」の部分だけが切り離されて、第四文集『濤声』に所収。乗合馬車に乗る男の帽子がふとした拍子に吹き飛ばされてしまった。それを農夫が拾うが、男は頑として受け取ろうとしない。学習研究社版全集、第三巻。

57 『あの時分』

『早稲田文学』明治三九（1906）年六月。第四文集『濤声』に所収。明治の御代、学校の友人である樋口が鸚鵡を下宿へ持って帰ってきた。鸚鵡の挿話を皮切りに、既に過ぎてしまった学生時代の「あの時分」を振り返る短編。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1044.html>

58 『号外』

『新古文林』明治三九（1906）年八月。第四文集『濤声』に所収。「戦争が無いと生きて居る張り合いがない」が口癖の加藤男爵。生の張り合いをなくした戦争論者を前に、戦争なしで戦時中の緊張感を保つにはどうすればいいのか、という問いが提起される。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1055.html>

59 『入郷記』

『中央公論』明治三九（1906）年一〇月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。新橋から名古屋、名古屋から京都、そして船に乗ると、その船中で故郷の知り合いに偶然出会う。帰省直前の一青年が抱いた、旅の感傷を日記体で描く。学習研究社版全集、第三巻。

60 『恋を恋する人』

『中央公論』明治四〇（1907）年一月。第四文集『濤声』に所収。大友は失恋話を親身に聞いてもらった女中のお正のことが忘れられず、再び由縁の場所を訪れる。そして奇跡的にお正との再会を果たすが、大友は自分が抱いていたのが単純な恋心でないことに気づく。学習研究社版全集、第三巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card327.html>

61 『肘の侮辱』

『中学世界』明治四〇（1907）年一月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。矢島という文学者が中学校の講演で、その学校の洋画の教師である木谷が汽車のなかで生徒から受けた「侮辱」事件のことを告発する。上辺ではなく心の美の尊さを説く掌編。学習研究社版全集、第三巻。

62 『波の音』

『文章世界』明治四〇（1907）年一月。第四文集『濤声』に所収。山の手の方から海岸の学校に転任し、学校で寝泊りする教師は、夜中、波の音が気になり外に出るが、そこで一人の狂女に出会い、戦慄する。不思議な読後感を残す小説。学習研究社版全集第三巻。

63 『泣き笑ひ』

『新古文林』明治四〇（1907）年三月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。いつも帰ってくる時刻に時之助が帰って来ない。両親は心配で女中を使いに出したりするが、当人は呑気に帰って来、道草で釣りをしたその釣果を自慢する。学習研究社版全集、第四巻。

64 『疲労』

『趣味』明治四〇（1907）年六月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。京橋区の高級宿屋、大来館。来客中西は大森を訪ねるが、運なく行き違い、その知らせを受けた大森は再度中西に連絡をとろうとする。日露戦争に勝ったものの、心身に抜がたい疲労を残した知識人の姿を描く。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card325.html>

65 『窮死』

『文芸倶楽部』明治四〇（1907）年六月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。安住の地なき瀕死の労働者、文公が彷徨い歩く。社会の不合理から生まれた下層社会の悲惨な零落に注意をむけ、なおかつその抗議に満ちた作。社会主義的傾向を見せる。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card328.html>

66 『都の友へ、B生より』

『趣味』明治四〇（1907）年七月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。温泉地へ赴いた男が都会の友に向けて送る書簡。鮎釣りがきっかけで以前顔見知りになったボズさんを訪ねてみると、既に帰らぬ人となっていた。故人への感傷。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1408.html>

67 『湯ヶ原ゆき』

『日本』明治四〇（1907）年七月一七～三〇日。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。旅行のため、湯ヶ原温泉の中西屋に向かって家族と共に汽車に乗る「自分」。その道中の何気ない出来事や、些細なやり取りを淡々と描いていく。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card1407.html>

68 『都の友へ、S生より』

『中央公論』明治四〇（1907）年八月。どうして都会から田舎へ、そして四人での共同生活を始めたのか。二者の問答の形式をとりながら、清貧の田舎生活の一部をスケッチして示す。内容の軽い小品。学習研究社版全集、第四巻。

69 『暴風』

『日本』明治四〇（1907）年八月八～二六日。作者没後、第六文集『渚』に所収。謎めいた雰囲気

気の男、今村龍一の結婚問題をめぐって、家族や友人など周囲の者が右往左往する。長編の構想がありつつも作者の病気のため頓挫した、未完の作。学習研究社版全集、第四巻。

70 『節操』

『太陽』明治四〇（1907）年九月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。銀之助は静と結婚するつもりでいたが、親族や友から非難が出て別の女と結婚した。あるとき、静から一通の手紙が届く。『夫婦』とは別角度から夫婦問題を取り上げ、節操とは何かを問う。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card43272.html>

71 『渚』

『文章世界』明治四〇（1907）年一二月。作者没後、第六文集『渚』に所収。K生が転地先から親友のT君へ送った手紙を集めたもの。渚には様々なものが漂流するが、どれも断片的なものだ。そんな挿話の数々。長編の構想があったが未完に終わった。学習研究社版全集、第四巻。

72 『竹の木戸』

『中央公論』明治四一（1908）年一月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。郊外で生活するあの家庭と竹の木戸で繋がっているその隣りの植木屋夫婦が起こしてしまった、炭の盗難事件に関する悲劇を描く。独歩のアイロニカルな運命観が伺える。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card4318.html>

73 『二老人』

『文章世界』明治四一（1908）年一月。作者没後、第五文集『独歩集第二』に所収。官職をやめても未だ稼ぎを当てにする家族に辟易する石井老人。そして未だ勤労しつつも純然たる独身者である河田老人。二人の対比を通して、人生の不思議と悲哀を表現する。学習研究社版全集、第四巻。

<http://www.aozora.gr.jp/cards/000038/card321.html>

国木田独歩全小説紹介

<http://p.booklog.jp/book/70610>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/70610>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/70610>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ